

3章まとめ(2)
第2節・3節・8節 絵本の読み聞かせ

	必要な能力	外界を認知する能力		
	なぜ未来型能力か？	前頁参照		
	具体的な能力	絵本による物語理解		
1. 幼児・児童における未来型能力	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p><絵本のタイトルという、いわば物語の導入部分に関する課題> 3歳&4歳:ビデオ絵本<絵本 →ビデオ絵本:動作やアニメーションという視覚的な情報が豊かになるため、場面ごとの理解や記憶は高まる →絵本:物語全体の流れを理解するという点はビデオ絵本よりもすぐれている。</p>	<p><絵本の内容の記憶力に関する課題> →3歳児、4歳児:ビデオ絵本>絵本 [3歳児]物語全体の流れを理解するというよりも場面ごとに理解していく傾向。 ビデオ絵本:各場面に動作が伴うことで場面の視覚的印象が高まる [4歳児]ビデオ絵本の場合、雨の音が強調されるなど、各場面が記憶に残りやすい構成 →ビデオ絵本の方が正答率が高まる</p> <p>⇔[5歳児]ページごとの場面ではなく、物語のストーリーを理解することが優先される →場面の特徴が強調されるビデオ絵本ではなく、ストーリー理解がより可能である絵本の正答率が高まった？</p>	<p><物語理解と視線の関係> 【3歳児】 物語理解正解者→問題のターゲットとなる部分を注視 不正解者→ターゲットとなる部分には読み聞かせ中に視線を向けていない。文字に対しての注視が多い。</p> <p>【5歳児】物語理解正解者→ターゲット部位への注視は少なく、むしろ文字に注目をしている 不正解者→文字よりもターゲット部位への注視が多く見られた。</p>
2. 幼児・児童における未来型能力の育成	育成方法の提案・実施	子どもの視線行動のパターンが分かれば、読み手の読み方や指さしなどによる介入によって、物語の理解を促進するような読み聞かせを行うことができるかもしれない。同時に、絵本を読んでもらう子どもにとっても、多くの絵本を、繰り返し読んでもらいながら、効率よく、適切に見るべき部分を抑えられる技を身につけていくことができるようになるだろう。また絵本を読んだ後、主人公の変化やその変化を促す出来事についての振り返りの言葉かけを行うことで、子どもたちは、物語の構造を理解することができるようになるであろう。		
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		絵本のストーリー理解を意識した読み聞かせを行う。指差しでターゲット部位へ視線を促したり、難易度の高い部分には繰り返し読む際に、補足説明を入れたりする。	
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	絵本を読むときの工夫の聞き取り調査を保育園職員を対象に実施→結果:①絵本を読む時の工夫②日常の保育で、他者である友達を意識させるような工夫③身体表現を促すような工夫について、あげられた。		
	育成方法の提案・実施	教員育成課程入学前の学生と学部3年生を対象にし実験結果を基に授業を構成した実践を行った。		
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	「もっと絵本のことについて勉強したい」というコメントが数多く示され、幼児教育を専門とする本学が目指す学士力の「汎用的スキル」の「目標を設定して進んで取り組む態度」が向上し、一定の効果を示した		